

障害児者の地域生活支援

—「障がい者支援ネット秋田リップル」の取り組み—

今野和夫

Social Support for Community Life of People with Disabilities

Kazuo KONNO

Abstract

I established an informal network of social support for community life of people with disabilities. It is composed of various members, such as teachers of schools for children with disabilities, staffs of institutions for people with disabilities, people with disabilities and their families.

This paper mentioned of the features and activities of the network. As the features, I pointed out the sharing, volunteerism, equality, cooperation, openness, and flexibility. Furthermore the significance of the network was mentioned. The possibility to enlarge two way support among members in community life was stressed.

Future directions of the network were suggested. Thoughtful support for people with disabilities to access to the place for meeting was stressed. It was pointed that increasing the number of teachers of ordinary schools and schools for children with disabilities who participated in activities of the network was valuable for the enrichment and development of special support education.

Key words : social support, informal support network, people with disabilities

筆者は、障害者の地域生活を支援するために、インフォーマルなネットワークを立ち上げた。それは、知的障害特別支援学校の教師、障害者施設の職員、障害者本人やその家族など、支援に関わる多様な会員で構成されている。

本稿は、このネットワークの特徴や活動について言及した。特徴については、わかち合い・自発性・対等性・協働・開放性・柔軟性ということが指摘された。さらにネットワークの意義にも言及したが、そこでは、地域生活における会員相互の双方向的な支援がもたらされるということが、強調された。

ネットワークの今後の方向性も示されたが、そこでは、ネットワークの活動の場所に障害者が安心して確実にたどり着けるよう、十分配慮された支援が欠かせないことが強調された。また、ネットワークに参加する通常学校や特別支援学校の教師の人数を増やすことは、特別支援教育の充実及び発展にも寄与しうることを指摘した。

I. はじめに

障害者の支援に関わる医療、教育、福祉、労働等のどの分野においても、他分野との「連携」がキーワードとなって久しく、専門的なフォーマルなレベルでの仕事としての連携が、そのあり方の検討・追究をも含めて、進められつつある。

一方、背後にある組織（社会福祉施設、学校、親の会、家庭等）やその中での立場（管理職、会の代表、雇用者、親等）如何、障害の有無、職業の有無などに関わらず、インフォーマルなレベルで、自発的に参加し連携を図ろうとする取り組みは決して多くない。

インフォーマルなレベルでの、いわば自発的・ボランティア的な出会い～フォーマルなレベルでの出会いより

も人間くさいと言える～は、障害のあるなしにかかわらず、またどの立場の人にとっても、「顔と心」の見える信頼できる相談相手、協力者、連携の相手を地域の中で見つけ、いわば相互支援的な仲間を作っていけるという意味でも、貴重なものであろう。

筆者は、1997年に、賛同者（福祉施設の職員、保護者、教員他）を得て「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」を発足させた。発足の経緯を含めて、この会の詳細については別の機会（2001）¹⁾に報告しているが、その目的は以下のようなものであった。

「障害児者が、地域の中で、家族を含む多くの人たちと豊かな人間関係を結びながら充実した社会生活及び人生を築いていけるためにはどのような支援が必要なの

か、また可能なのかを、障害児者・家族・支援者・専門家など様々な立場の人が互いの実践や経験を交流しつつ、一緒に学ぶ。さらに、地域福祉の充実に寄与し、かつ障害児者に対する一般の人たちの理解が深められるような活動を実施する」

「地域生活支援は出会いから：①それぞれの実践や経験、思い、情報をわかち合っていきましょう、②協力してやれそうなことに、挑戦していきましょう、③あなたも私も、ボランティア」

また、活動の内容としては以下のようなものが想定された。

①会員間の実践交流、②障害児者の地域福祉及びその関連領域（医療・保健・教育等）の現状と課題に関する学習、③障害児者の地域福祉への支援、④障害児者とその家族の生活、障害児者へのバリアー等に関する実態調査、⑤障害児者とその家族からの相談への対応、⑥障害児者とその家族、支援者、専門家、一般の人たちなど、様々な人たちの出会いと連携作りに寄与しうるイベントを開催する（年一回程度）、⑦一般の人たちへの情報発信。例えば、秋田市ないし秋田県のとりわけ民間レベルの活動を紹介でき、またそれに携わる人たちの思いを理解してもらえるような本かパンフレットを作る。

一方、賛同者（当面の世話人10数名）は、保護者や親の会の代表、障害者施設職員、大学や特別支援学校の教員などの立場で日頃は障害者の支援に関わる仕事に従事しており、それに加えて寸暇をぬったり休日などに最初から多くの内容の活動（その準備としての前後を含む）を始めることは大きな負担となると考えられた。そこで当面は実践交流や学習会を重視することとし、会の活動への集まり具合、入会希望者の数やニーズ（会への期待）の内容等も考慮し、活動を重ねる中で柱となる活動を絞って行こうという方向で、第1回（発足記念拡大学習会1997.3.23）を迎えようということになった。なお、会費は年間千円、入会資格については障害者本人を含めて特に定めないことにした。

ほぼ7年の間に実際に行われた活動は、秋田県内の通所施設や通園施設、音楽祭等の地域的な活動について、それにかかる思いを含めてリーダーに語っていただきながら会員間で学び・情報を交換する「会員学習会」（年2回ほど）、他県で行われている障害者支援の先進的な事例について、代表などその関係者を招待して講演会形式で学ぶ「拡大学習会」（年1回）、会員間の交流・懇親を主たる目的として日帰りで県内外をバスや汽車で旅行する「ミニ旅行」（年1回ほど）、会報の作成・発行（年3回ほど）、会員からのメッセージをまとめた小冊子（「こ

んな生活できたらいいな」「みんながしあわせに」）の作成・発行等であった。ちなみに会員学習会と拡大学習会については、親が参加しやすいようにボランティアによる託児の場を準備した。

一方このような活動には、それなりの成果が得られたと思うが、活動を重ねるに従い、準備や参加者の確保等に次第に多くの困難や負担が伴うことになった。すなわち例えば、以下のようなことである。

- ①会員は多いが、種々の活動への参加者が少ない。
- ②活動の準備・開催を含めて、世話人の負担が大きい。
- ③②とも関連し、また会員数が多くなったことも関係しようが、「世話人がそれ以外の会員に対してサービスをする」「世話人はサービスの提供者、他の会員はその受け手」といった構図になりがちであり、会員意識、会員としての自覚がはぐくまれにくい。
- ④会費の未納者が多く、その対応が難しい（毎年きちんと納めてくれる人との公平性）。
- ⑤世話人の私的・公的事情（精神的・身体的負担の増大、時間の作り出しや調整の困難）

親の会などの代表としての責任や負担の増大、施設等の本務上の負担や責任の増大、親の介護や自身の健康上の問題の増大。

そして、本ネットワークについては、会費の残金を利用して小冊子（「みんながしあわせに」）を作成・配布することで、いったん閉会することとなった。

一方、秋田ネットワークの閉会后、世話人間での交流や相互支援は続いたが、5年後の平成22年に入ると、「障害のある人にとっても支援者にとっても、多くの人たちとの豊かな関係作りが以前にも増して強く求められているのではないか。また集まって、一緒に活動したり学んだりしたい」「県内で長きにわたって地道に障害者への支援に取り組んできている人たちの存在を忘れていないか。そのような人たちから、その人の思いを含めてしっかり聞き取り、学ぶことが、人集め的に県外の著名な講師を招いて開かれる講演会よりも、その後の立場や分野を超えての地域の中での協力・連携作りの力となるのでは」との声が、ネットワークの世話人であった人たちの中から出始めた。筆者自身も同様の感想を抱いていたこともあって、世話人を務めた人やそれ以外の人たちも誘い、新たな組織の立ち上げの可能性について話し合う機会を設けた。

そしてその結果、秋田ネットワークを土台かつ反省材料として、新たに会を立ち上げること、その名称を「障がい者支援ネット秋田リップル」とすることが、全員の一致で決められた。

本稿では、障害者の地域生活の充実を目指す支援においては、地域の中での支援者同士のインフォーマルな出

会い・交流・協働、そしてそれらをきっかけとして生まれ、育まれる仲間の輪や相互支援が欠かせないとの考えで、「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」を布石として取り組みが始まった「障がい者支援ネット秋田リップル」について、これまでの活動内容を振り返るとともに、リップルの意義・可能性や今後の課題について考察したい。

Ⅱ. 秋田リップルの目的

リップルのイベント（実践交流会。後述）のたびに配布されるリップルの案内チラシには、以下のように記してある。

「私たちの会は、様々な分野（福祉、教育、行政、医療、親の会など）において、また様々な立場（教員や職員、ボランティア、家族の一員など）で障がいのある人を支援している人たちがときどき集まり、日頃の実践や思い、難儀していること、情報、知識、知恵などたくさんのお話をわかち合う会です。また時には余暇・文化的な活動も行い、くつろいだ楽しい気持ちもわかち合います。ちなみに障がいのある人や、障がいのある人とのかわりがこれまであまりない一般の人の参加も、大歓迎です。参加して下さった人たちが、たくさんのお話を通して、普段の生活や仕事上の、また抱えている夢の実現に向けての、頼もしい相談相手や仲間を新たに得ることができればと、願っています。

さらに、障がい者や支援者に関わる現状や課題、支援者の思いなど色々な中味の発信を、波紋（ripple）の広がりを引き起こす小石のように、地域社会の隅々までできればいいなど、考えています。

本会は、「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」（1997年～2004年）を前身としています。平成22年6月より、『障がいのある人にとっても支援者にとっても、多くの人たちとの豊かな関係作りが以前にも増して強く求められている』との思いを共有する様々な立場の人（施設職員、教員、保護者、親の会会員、学童保育指導員、ボランティア等）が世話人となって、新たな形でスタートしています。しばらく試行錯誤が続きますが、皆様からの応援、ご協力、ご助言をよろしくお願い致します。

なお、会員になられていない方が本会の活動へ参加することは、もちろん可能です。一方、本会の活動への協力と参加を希望される方（交流会などのイベントについて知り合いに案内して下さることも含めて）は、入会希望の手続きをお願いします。会費は特にいただきませんが、交流会などの際には、会員以外の参加者と同じよ

うに、運営への協力費（資料印刷、郵送代等として）を少々いただきますことをご了承願います。

あなたも私もボランティア、あなたも私もメッセンジャー。みんなで学び、みんなで考え、みんなで行動しながら、信頼し合える仲間の輪を広げていきましょう！」

「私の話などあまり参考にならない」とか「私は人前で話すのは苦手で」とか「偉い人の前では話しづらい」といった気持ちは誰にでもあろうが、そのような思いや遠慮が強い人からこそ学べること・得られることが多くあるかもしれない。

こうして、平成22年6月、「障害のある人にとっても支援者にとっても、多くの人たちとの豊かな関係作りが以前にも増して強く求められている」との思いを共有する様々な立場の10数名（施設職員、教員、保護者、親の会会員、学童保育指導員、ボランティア等）が世話人となって、「障がい者支援ネット秋田リップル」を発足させた。

この会では、会費を特に定めず、イベントの際の運営上の足し（資料等）とすべく、100円ないし200円程度を会場でいただいている。会費を定めないことにはマイナス面もあるが、滞納者への対応のあり方というどここの組織にもありがちな問題を避けること、会費を徴収する側が組織内で上位の立場・サービスの提供者と受け止められがちなことを避けることができている。

ちなみに、会の活動への参加については、特に資格や条件のようなものを定めていないが、一応以下のようなことが言える。

①障害者の支援者：福祉・教育・医療・行政等の専門的立場で障害者支援に関わっている人、地域のボランティア団体や親の会の一員として障害者支援に関わっている人、障害者の家族、当事者の組織や施設・事業所等において支援的な立場にいる人、等。

②支援者以外：障害者への支援に関心のある一般人（障害の有無を問わず）

Ⅲ. 秋田リップルの基本性格（大事にしていること）

秋田リップルの前身とも言える秋田ネットワークについてもおおそ当てはまることであるが、リップルの発足時から大切にされていると思われることを言文化すれば、それは①わかち合い、②自発性、③対等性、④協働性、⑤開放性、⑥柔軟性である。

①わかち合い

「わかちあい」ということは、セルフヘルプグループ

の特徴として岡(1999)²⁾によりすでに指摘されているところであるが、リップルにおいても以下のような様々なことをわかち合うことが大切にされている。

*実践&思い(過去・現在・未来)

これまで(過去)どのような思いを寄せてどのようなことに取り組んで来たのか、現在どのような思いでどのような取り組みをしているのか、これからどのような思いを寄せてどのようなことに取り組みたいと考えているのか。

*信条・理念・基本姿勢(考え方):自身の考え(例えば、「支援のあり方」について)

*知恵・アイデア・知見:自身の経験・体験・労苦を通して得た発想・発案(助言として他人に役立つもの)。

*情報(知識, イベント等):福祉や教育等についての知っている事柄(それぞれの立場・分野で知っている事柄。例えば, 福祉関係者は福祉制度。教員は特別支援教育)。自身が参画しているイベントの開催についての情報(いつ, どこで, どのようなイベントが行われるか)。

*楽しい気分:

*その他

②自発性:みんながボランティア。自発的な入会や、自発的な活動への参加であること。

③対等性:別の組織(学校や施設, 親の会, 大学のボランティアサークル等)においては役職があっても、リップルでは上下の関係がなく対等であり、自分の考えを気兼ねなく言えること、それが誰からも受け止められること。ちなみに、筆者が顧問を務める大学のボランティアサークルのメンバーにも、リップルの活動を助ける「ボランティア」としてではなくて、他のメンバーとともに障害者の地域生活支援を担う地域の一員、リップルの一員として、参加してもらっている。

④協働性:③とも関係するが、活動にともに参画すること。世話人はもちろん、会員全体が、ともに活動を作り上げ、リップルの存在や活動を地域に伝え、リップルを支え、育てていく仲間であること。

⑤開放性:活動に会員以外の人でも参加できること。

⑥柔軟性:リップルやその活動のあり方を常に模索・修正できること。

障害のある人を含めて誰にでも(若いも若きも、さらにたとえ色々な組織でリーダー的存在や発言力の強い存在とはなっていないとしても)、山あり谷ありの人生を歩んできた歴史があり、支援のあり方を考えたりする上で、またこれからともに協力しながら支援活動を進めながらの人生を歩んでいく上で、とても参考となったりエネルギーとなるような体験をしてきているだろう。会に関わるみんなが、だれでも遠慮や気兼ねなく話しやすい雰囲気

気、意見を発信しやすい雰囲気作りを大切にしていると言える。

IV. 秋田リップルの活動

1. 障がい者支援ネット秋田リップルの活動内容

原則として年に2回の交流会の実現を旨とし、年度末の世話人会においては、次年度の交流会のテーマ(主たる内容)や、そのテーマに沿った内容の叩き台を立案して世話会にその案を提起する担当グループが世話人たちの中から決められる。(選考作業を経なくても、自らの志願という形で、進んできている)

話題提供者には、普段の実践内容や事業の内容の紹介のみならず、より個人的なレベルの事柄(例えばどうしてそのような事業や活動に着手することになったのか、それにかかる思い、多くの人に伝えたい・残したいメッセージ)の紹介・発信を大切にしていきたいということ伝えて、依頼している。

平成22年度, 23年度, 24年度(11月現在)の秋田リップルの活動について、実践交流会を中心に以下に紹介する。

(敬称略)

《第1回》私の現在進行形～実践交流会～

日時:平成22年6月26日(土)

場所:秋田県社会福祉会館

13:00～ オープンセレモニー

◎みんなで楽しく手話ソング～「夢」(宮沢勝之/詞・曲)

(注)宮沢勝之は、東京都の障害者施設の指導員を務める傍ら、障がい児やそのきょうだいの思い、命そして平和の大切さを歌に託しているシンガーソングライター。

13:20～ 発足記念講演「ふたたびのいのち」

講師 梶原早千枝(大阪府サポートハウス親の会代表)

(注)サポートハウス(ファミリーハウス)とは、重篤な病気や手術で高度の医療が可能な総合病院に子どもが入院することによる家族の経済的・身体的・精神的負担を軽減するための、病院の近くに建てられた低額の利用料の家や施設のこと。ボランティアによる運営が基本。全国的に、その数はきわめて少ない。

14:50～ 私の現在進行形(話題提供)

①佐藤睦子「やっぱり続けよう!とっておきの音楽祭」

「とっておきの音楽祭 in あきた」実行委員長)

(注)とっておきの音楽祭 in あきたとは、「とっておきの音楽祭 in 仙台」の秋田版。2002年より。障害児者に関わる様々な団体に呼びかけて、音楽発表を通して相互の交流・一般市民との交流をはかってきてい

る。

- ②鶴谷春美「食べることへの支援～食べるよろこびと幸せを多くの人に～（県立大曲養護学校教諭）」
- ③佐藤裕子「地域でゆたかに生きる」（由利本荘市障害者支援事業所 NPO 法人「逢い」、支援責任者）

《第2回》私の現在進行形～実践交流会～

日時：9月26日（日）

場所：秋田大学教育文化学部

13：15～ オープンセレモニー

- ◎みんなで楽しく手話ソング～「夢」
- ◎フルート演奏 「秋田県立秋田きらり支援学校校歌」
佐々木千佳子

13：30～ 参加者交流（自己紹介）

13：50～ 私の現在進行形（話題提供）

- ①「障がいのある子の父親が願うこと～つながる社会を夢見て～」
宮城良春（県立養護学校天王みどり学園、保護者）
- ②「不思議の国のアリス in AKITA（高次脳機能障害の当事者会）について」佐藤恵・富夫
- ③「知的障がいがある人たちとともに」三浦憲一（竹生寮、寮長）

16：00～16：15 情報提供コーナー&閉会

《第3回》私の現在進行形～実践交流会～

日時：11月28日（日）

場所：秋田大学一般教育1号館

13：15～ オープンセレモニー みんなで楽しく手話ソング

13：30～ 私の現在進行形（話題提供）

- ①宮沢勝之コンサートについて（実行委員会委員長佐藤京子）
- ②NPO法人なないろサポートネット（「Ohana ケアセンター」支援員）

14：30～16：00 みんなでおもちゃを作りましょう！

協力：「手づくりおもちゃ工房リップル」のメンバー。
工房リップルは、保育士経験者など、おもちゃづくりと子どもの笑顔が大好きな人たちが集まったグループで、秋田リップルよりも以前から活動。

16：00 閉会

《第4回》私の現在進行形～実践交流会～

「発達障害の理解と支援のファーストステップ」

日時：平成23年5月22日（日）

場所：秋田大学教育文化学部3号館342号室

13：10～ みんなで楽しく手話ソング

13：20～ 参加者自己紹介

13：30～ 講演「私たちのこれまで・そしてこれから」

東條裕志（秋田LD・AD/HD親の会「アインシュタイン」会長）

東條真理（十人十色なカエルの会代表）

15:00～ 私の現在進行形（話題提供）

「秋田県発達障害者支援センターふきのとう秋田」の紹介 澤井ちはや（支援センター主事）

15：30～16：00 意見交流（講演・話題提供を受けて）

《第5回》私の現在進行形～実践交流会～

「当事者からのメッセージ」

日時：平成23年11月27日（日）

13：00～ みんなで楽しく手話ソング「夢」

13：10～ 私の現在進行形（話題提供）

- ①佐藤武「いまだから伝えたい私のこと」
～生きづらさをこえて共に生きられる社会を願って～
- ②佐藤操「住みなれた家で、ふつうの生活・人生を」
NPO法人なないろサポートネット
Ohana ケアセンター代表

（注）痰の吸引、経管栄養等を必要とする人とその家族が、我が家で安心・安全な生活を送ることができるよう、ホームヘルパーの派遣（医療的ケアを含む）等の活動を実施中。

15：00～ みんなでおもちゃを作りましょう！

by 手づくりおもちゃ工房リップル

（写真は、実践交流会のひとつコマ）



《第6回》私の現在進行形～実践交流会～

「ゆたかな人生づくり～『働くこと』を生きる糧に～」

日時：平成24年6月23日（土）

秋田大学医学部保健学科棟1階第1講義室

13：00～ みんなで楽しく手話ソング

「夢」 作詞・作曲 宮沢勝之

13：20～ 私の現在進行形（話題提供）

- ①佐藤敏明（株式会社 POCHI ワン～厚生労働大臣認定

特例子会社～職業生活相談員)

- ②長谷川真 (POCHI ワン社員)
 ③牧野真悟 (社会福祉法人いずみ会ウエルビューいずみ
 障害者就業・生活支援センター/主任就業・生活支援
 ワーカー)
 15:10～ 「働くこと」への支援の現状と課題 内海淳
 (秋田大学障害児教育講座)
 15:40～ 情報提供・交換コーナー

 《第7回》私の現在進行形～実践交流会～

「ゆたかな人生づくり～『働くこと』を生きる糧に～」
 日時：平成24年11月17日(土)13:00～16:00
 会場：秋田大学医学部保健学科棟1階第1講義室
 13:00～ オープンセレモニー
 ・みんなで楽しく手話ソング:「夢」(宮沢勝之作詞・
 作曲)

- 13:10～ 私の現在進行形(話題提供)
 ①藤原芳子(指定就労継続支援B型事業所「ごろりんは
 うす」管理者・職業指導員)&利用者の方
 「ごろりんはうすの」スローガン:精神障がいを持つ
 人の「やりたい仕事」「生きたい人生」を応援。
 ②奈良克久(NPO法人障がい者自立生活センター「ほっ
 と大仙」障がい福祉サービス事業所「ほっぺ」管理者)
 ほっと大仙のスローガン:「働きたい」「社会の役に立
 ちたい」という想いを形に。
 ③宮崎 洋(NPO法人社会福祉自立支援センター萬成
 会共同作業所くだけ寮 寮長)「くだけ寮」のス
 ローガン:「健常者と共に働き、自分の人生を確実に
 実らせよう」
 15:30～15:45 情報交換
 15:45～16:00 閉会あいさつ

V. 障がい者支援ネット秋田リップルの意義・可能性

発足してまだ短い年月しか経ていないリップルである
 が、これまでの活動を振り返ってみると、以下のような
 多くの意義が確認・推察できる。

①多様な交流・連携

秋田リップルの大きな目的と言える、交流会での出会
 いを通してのその後の協力・連携・仲間づくりが、実現
 しつつある。例えば、第1回の交流会での講演(梶原氏)
 を契機として、大学病院などの総合的な病院への長期入
 院を要する子どもの家族を支えるファミリーハウスづく
 りの気運が高まり、リップル会員からの大きな協力も
 あって平成24年11月に秋田市に第1号のハウスが実現
 した。また、話題提供をしてくださったNPOが率先す

る東日本大震災被災地への募金運動に、リップルの会員
 も協力をしている。また、リップル世話人の一人の夢(自
 宅を改造して障害者への短期入所事業を立ち上げる)の
 実現を、現在世話人たちで応援・協力している。第3回、
 第5回の交流会における活動紹介を機に(おもちゃ工房
 リップル)、参加者が属する他の団体からの協力依頼が
 続いている。

②仲間づくり

そして、上述のような交流・連携を通して、仲間ある
 いは友と言える関係へと人間関係を深めていっている人
 たちもいる。

③自己の振り返り・学び(人として、支援者として)

様々な立場・考えで支援に携わる人たちとの交流を通
 して、人として、支援者としての自分のあり方を振り返っ
 たり学んだりできる。

④それぞれの持ち場の見直し・発展

リップルへの参加を通して学んだこと、得られた情報
 を、自分の実践(例えば筆者の場合には、大学の教員と
 しての実践)に生かすことができる。例えば、特別支援
 教育においては、個別的教育支援計画の作成上も、医療
 や福祉等の他分野に関する情報や、児童・生徒の現在及
 び将来の地域生活に関わる情報は重要であるが、「多様
 な分野・立場で地域生活支援に関わる多様な関係者の参
 加・交流」が大きな特徴と言えるリップルへの教員の参
 加は、そのような情報を豊富に取得・収集できる好機と
 言えよう。

⑤世代間・ベテランと若手間の交流・伝播

年齢差や経験の多少を超えた協働的取り組み・意見の
 交流を通して、多くの考えや知恵、情報をみんなで共有
 できる。

⑥若い支援者間の枠を超えた出会いとつながり

普段はそれぞれの持ち場でとかく自分の考えを言いにく
 かったり、相談相手を手に入れられないでいる若い支
 援者同士が参画をかさねることを通して親しくなり、ふ
 だんのかげがえのない相談相手・協力者となることがで
 きる。

⑦息抜き・リフレッシュ

実践交流会では、手話ソングやおもちゃ作りなどの活
 動中に、また休憩時間や会の終了後などの色んな場面
 において、参加者の笑顔や楽しい語らいが認められる。

⑧新たな活動グループの誕生

リップルへの参画を通して目的(夢)を共有できた人
 たちが、その実現に向けたグループを新たに立ち上げたり
 している。

⑨物心両面における、また様々な「枠(組織・分野)」 間のバリアフリー

⑩その他

リップルへの参加は、障害者本人にとって、地域の中での豊かな生活と発達の実現に欠かせない、信頼のできる相談相手や仲間が得られる好機とも言える。

Ⅵ. 秋田リップルの今後の方向性

基本的なあり方（自発性・対等性・協働性・柔軟性・開放性）を大切にしつつ、また活動の内容や回数、会員数の増加についてもあまり欲張らずに、さらには上で言及したような意義が失われないようにしつつ、細く長く継続させていきたいと考えるが、今後に向けては以下のような課題を挙げることができる。

①本人参加への配慮と支援

交流会の会場は、その利用料が安いこと（高ければ、参加費をアップせざるを得ないだろう）、駐車場が利用しやすいこと（無料でスペースが広いことを含む）など、どうしても参加者の多くを占めるであろう車使用者（多くは健常者）のニーズに沿うことを原則に選ばざるを得ない。一方、そのような場所を秋田駅の近くに確保することは決して容易ではなく、駅からバスで会場に来ようとする人には、なにかと負担が大きくなっている。交流会の前には、参加希望者（特に障害者）から、活動（交流会）に参加したくても、会場がわからない、会場までの交通手段がわからないといった相談がある。住所や地図を電話やファックスなどで教えても、会が始まるまで会場にたどり着けない人もいる。天気が悪ければ、行き帰りも大変である。世話人が自身の車に同乗させたりして、可能な限り対応をしているが、福祉の制度（例えば移動サービス）を知らない人や、利用させがらない家族の人もいるようである。また利用したくても公的なサービスは手続きが容易でないこともある。

地域的なイベントに対する知的に、身体的に、あるいは精神的に多くの細やかな配慮を要する人たちの参加希望を、どうにかたちで保障・実現できるのかは、本リップルに限らず、フォーマル及びインフォーマルな地域生活支援（自立と社会参加）の取り組みの大きな課題である。

②実践交流会での話題提供者からの発言や提言、障害者本人などフロアからの発言等（障害者にとっての日々の困難さについてのリアルな状況報告）は、障害児者の教育や行政、福祉、医療等の分野におけるフォーマルな専門的支援上もきわめて大切かつ貴重なものである。それらをより多くの関連機関・団体やその職場の人たちに届け、それぞれの立場での取り組みに活かしてもらえようという工夫や取り組みが、必要と思われる（例えば、様々な発言を文章化して冊子にまとめるなど）。

③リップルの人材の活用

世話人を含めて、リップル（会員数は現在50名ほど）は実に多様な立場・分野の人たちの集まりである。その多様さを発揮して、学校や地域におけるボランティアの養成やボランティアへの支援、障害者の理解推進に寄与できるかもしれない。

④障害児者の余暇活動への支援は、地域生活支援の重要な課題と言えるが、理想的にはインクルーシブな社会づくりが強調されつつある一方で、非障害者との交流や、交流を重ねて非障害者との間の自然な友だち関係の成立へと発展しうるような支援の取り組みは、決して多くない。信頼し合い何でも相談できるような仲間や友だちができるきっかけとなるような余暇活動支援を、秋田リップルとして何か実現できればと考える。

⑤リップルの活動への学校教員の参加の促し

リップルの意義に関連して少し触れたことであるが、教員は本リップルの活動へ参加することで、地域との相互信頼的な連携に根ざして特別支援教育の実践を充実・発展させていくことに役立つ地域の諸分野の豊富な情報や資源を得ることができる。一方、リップルの活動への通常学校や特別支援学校の教員の参加はまだきわめて少なく、より多くの人の参加をもたらしうような配慮や工夫が今後も求められる。

Ⅵ. おわりに

本稿では、「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」（1997～2004）を伏線として平成22年に発足した「障がい者支援ネット秋田リップル」について、その活動内容や意義、課題等について振り返ってみた。

当面は、年度ごとのテーマが定められ、その意義や課題などを確認しながら活動が続けられようが、それぞれの立場、そして私的なレベルでの事情・忙しさがあるとはいえ、現在のリップルの活動には、やはり大黒柱的なもの（心棒）が欠けていることも否めない。換言すると、リップルの目的として特定の共通課題・問題（例えば、就労の場の確保、発達障害についての社会的理解・啓発）の解決を掲げ、その解決のために各自の公的・私的な面での負担を大きくしてでも一丸となって突き進む、といった気概や方向性には、正直欠けていると言わざるを得ない。なんらかの「あやふやさ」「ものたりなさ」を筆者自身感じているが、そのような強い方向性を打ち出すことで、世話人の結びつきがいつそう強まるということも、会員が増大するということが、考えにくい。

NPOの認可を得るなどの可能性も考えられるが、既にそれぞれの立場で普段は支援活動に従事している人たちがそのことでさらに大きな負担を担うことがあってはな

らないし、認可を得ることで、組織や事業内容が硬直化してしまい、先に挙げたような秋田リップルの基本（自発性、対等性、協働性、柔軟性、開放性）が損なわれてもなるまい。

これまでと同様世話人会の開催を大切にしつつ、また多くの参加者・会員の意見に耳を傾けながら、これからも秋田リップルの存在意義や方向性を確認・検討し続けたい。

謝辞 「障がい者支援ネット秋田リップル」の活動において筆者を支えてくださっている会員の皆様、特に15名の世話人の皆様に、この場を借りて心から感謝を申し上げます。

文献

- 1) 今野和夫 (2001) : 障害児者の地域生活支援—「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」の取り組み, 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学第 55 集, pp33 ~ 41.
- 2) 岡知史 (1999) : セルフヘルプグループ—わかちあい・ひとりだち・ときはなち—, 星和書店.